

8 タマネギ灰色腐敗病を防ぐにはフルジオキシニル水和剤の定植時苗浸漬が有効

ねらいと成果

タマネギの一大産地である淡路島で、近年灰色腐敗病が多発して問題となっている。これは薬剤耐性菌の出現により、現地で広く使用されている定植時の苗浸漬薬剤が効かなくなったことが大きな要因である。また、現地では機械化によってセル苗が導入されており、セル苗での防除対策についても検討する必要がある。そこで、セル苗と地床苗に対し、数種薬剤について定植時苗浸漬の防除効果を検討したところ、どちらの苗においてもフルジオキシニル水和剤（セイビアフロアブル）の防除効果をもっとも高いことがわかった。なお、フルジオキシニル水和剤は2002年12月に500倍の5分間苗浸漬で農薬登録された。

内容

<試験方法>

試験は三原郡三原町の淡路農技内ほ場で実施した。品種は「ターザン」を用い、2001年10月25日に地床あるいは324穴セルトレイに播種した。12月3日にフルジオキシニル水和剤ほか3剤について、いずれも500倍液で、地床苗は5分間浸漬、セル苗はトレイごと地際部まで薬液に浸漬した後風乾した。その後、畝間135cm、条間20～25cm、株間11cmの4条植で、1区8.8㎡（1.35m×6.5m、230～280株）の3連制で定植した。

灰色腐敗病菌は以下の方法で接種した。PSA培地上で12月4日から21日まで培養し、得られた胞子を滅菌水で 10^5 個/mlに調整して胞子懸濁液を作成した。12月21日に展着剤10000倍を加用し、株あたり5ml

を噴霧接種した。

2002年2月1日、2月14日、3月18日、4月1日、4月10日に試験区の全株について肉眼で地上部の発病を調査し、累積の発病株数より発病株率を算出した。なお、調査ごとに発病株は抜き取った。また、根部の発病状況については4月10、15日の2回に分けて1区300株を掘り取り調査した。

<結果>

発病は2月14日から認められ、次第に増加した。4月の最終調査（図1、2）より、フルジオキシニル水和剤が地床苗、セル苗ともに地上、地下部を通して最も高い効果が認められた。育苗法の比較ではセル苗の方が地床苗よりも地上部の発病株率は低かったが、地下部は同程度で、発病は多かった。プロシミドン水和剤は地上部の発病はよく抑えていたが、地下部の発病が多く見られた。テブコナゾール水和剤は地上、地下部ともに防除効果が認められたが、その程度はフルジオキシニル水和剤より低かった。チオファネートメチル水和剤耐性菌を接種源に用いたため、チオファネートメチル水和剤は全く防除効果が見られなかった。

普及上の注意事項

現在、農薬登録があるフルジオキシニル水和剤は十分な防除効果が認められるが、耐性菌の出現を回避するために、使用は定植時苗浸漬処理の1回にとどめ、生育期間中の薬剤散布は他の防除効果の高い薬剤から選択する。

田中 尚智（農業技セ・病害虫防除部）

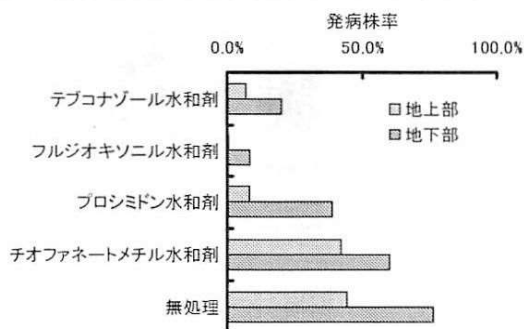


図1 地床苗に対する定植時苗浸漬処理の防除効果

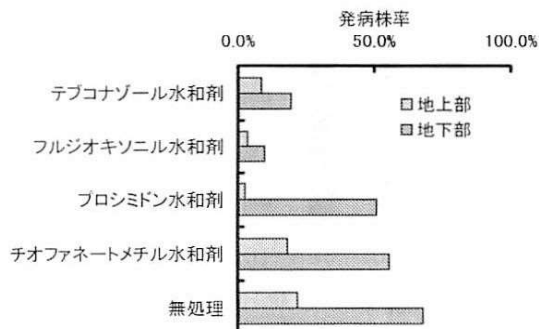


図2 セル苗に対する定植時苗浸漬処理の防除効果